介 護 職 員 自 己 評 価 表

2022年8月17日

事業所名	定期巡回・随時対応型訪問介護看護きいれ （日常的・継続的な医学管理担当チーム）

	正社員	非常勤社員
介護支援専門員	2人	
認定特定行為業務従事者	7人	1人
介護福祉士	8人	1人
実務者･初任者研修		
看護師	4人	3人

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よく できている	なんとか できている	あまり できていない	ほとんど できていない	備　考
前回の課題に関する改善	14.0%	42.1%	28.9%	14.9%	

前回の改善計画

認定特定行為業務従事者が日常的・継続的な医学管理が求められる対象者の在宅支援をしている。利用者の多くが居住系施設で暮らしていることから、全ての対象者にシート型体振動計を貸出し、訪問時の状態に加えてバイタルサイン・SPO2・心拍数を主治医に連携している。生活の質を睡眠時間・睡眠効率等で評価し、看護師・理学療法士を加えたカンファレンスで健康状態を評価している。スタッフには、感染予防の徹底を協力してもらい、必要性に応じたPCR検査でコロナ禍に対応している。スタッフの負担は決して小さくなく、スタッフへの声掛けを増やし、短時間で行うスタッフミーティングやスーパービジョンを高頻度で行うことを計画した。スタッフとの面談は、業務のことに限らず、プライベートな事情に寄り添える関わりを心掛け、爆発的に増加するコロナ感染リスクにスタッフ全員で備えている。

前回の改善計画に対する取組み結果

カンファレンスは看護師・理学療法士を加えて実施し、ご利用者本人とご家族の同意を得て、37度以上の発熱と基礎疾患を踏まえて医療連携しPCR検査をお願いしている。スタッフには、感染予防の徹底を協力してもらい、必要性に応じたPCR検査と抗原検査で感染予防の徹底を図っているが、子育て世代の負担は大きく、スタッフのメンタル支援では解決できない課題もある。ご利用者とご家族の施設はガラス越し面会、オンライン面会で代替されているものの、一定の制限はあるので、ご利用者の写真や動画により日ごろの暮らしぶりをご家族に伝えている。一方、自らの訴えができないご利用者も多く課題は少なくない。

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目（偏差値）		よく できている （60以上）	なんとか できている （50～59）	あまり できていない （40～49）	ほとんど できていない （39以下）	合　計
SECTION　1	対象者の接し方や態度について	18.2%	27.3%	36.4%	18.2%	100%
SECTION　2	仕事上の態度について	18.2%	36.4%	36.4%	9.1%	100%
SECTION　3	食事について	9.1%	45.5%	27.3%	18.2%	100%
SECTION　4	移乗や移動について	18.2%	36.4%	18.2%	27.3%	100%
SECTION　5	排泄について	9.1%	45.5%	36.4%	9.1%	100%
SECTION　6	入浴について	9.1%	45.5%	27.3%	18.2%	100%
SECTION　7	着替えや整容について	9.1%	54.5%	18.2%	18.2%	100%
SECTION　8	服薬について	18.2%	36.4%	27.3%	18.2%	100%
SECTION　9	意思疎通について	18.2%	45.5%	27.3%	9.1%	100%
SECTION　10	行動障害について	9.1%	54.5%	27.3%	9.1%	100%
SECTION　11	普通の生活やアクティビティについて	18.2%	36.4%	36.4%	9.1%	100%

自己評価及び改善が必要な事項

体調変化やバイタルサインを活かした速やかな医療連携、看護師・理学療法士を加えたカンファレンス、37度以上の発熱と基礎疾患を踏まえたPCR検査は機能し、適切な介護・医療および感染対策が図られている。ターミナル期を迎えているご利用者もおられ、医師の指示に素早く応えられるようになった。スタッフの感染予防対策は、ワクチン未接種が多い子育て世代の精神的・経済的な負担を高めた。たとえ有給がなくなっても一定程度経済的に支えられるようにした。必要に応じたPCR検査と必要性を勘案した出勤毎の抗原検査で感染予防の徹底を図りつつ支援を継続しているが、スタッフの精神的負担と事業所の費用負担は大きく対応が求められる。スタッフへの声掛けを増やし、短時間で行うスタッフミーティングやスーパービジョンを高頻度で行うなどを実施しているが、爆発的に高まる第7波の感染リスクは生活の負担となり、業務のことに限らず、プライベートな事情に寄り添える関わりを心掛け、スタッフ全員で適切な支援を維持している。

主任 畠田美香

外部評価者

こちらの事業所は、経管栄養や在宅酸素、高い頻度の喀痰吸引等が必要なご利用者が多く、日常的・継続的な医学管理が必須になっています。支援には高いスキルと配慮が求められるのは勿論のこと、感染予防の徹底も重要でしょう。本年7月から始まった新型コロナ第7波は、7月末から4週連続で世界最多になり、ワクチン接種が遅れた子育て世代の感染者が急増しています。こちらでも同様に、子育て世代のスタッフを中心に、有給で賄えず経済的負担になっていました。コロナ関連であれば所得が得られるように整備され、経済的な負担は解消していましたが、精神的な負担解消は限られるようでした。面談やスーパービジョンを高頻度で行い精神的負担の解消を目指していましたが、コロナ禍で不規則にならざるを得ないシフトも加わり課題となっていました。スタッフに寄り添った対応がなされ、モチベーションも保たれているようですので、スタッフ合意を得たうえで、エッセンシャル・ワークとしての役割をしっかりと果たしてください。ご利用者との関係性は、支援時のご利用者の写真や動画により支援の状況をご家族に伝えておられ、ご家族との関係性は良好であることが分かりました。一方、自らの訴えができないご利用者も多く、ご家族に伝えることが課題であると評価されていましたが、ちょっとした変化でも家族は嬉しいものです。写真や動画にあわせて、ちょっとした変化をお伝えするといいかもしれません。総合的な評価は、医療と介護が連携し支援を行っている様子が推察されました。これからも地域に根ざした事業所として頑張ってください。

〒891-0141 鹿児島市谷山中央5丁目37-11-302
特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所
社会福祉学博士　田　中　安　平